

# 南方熊楠から見た、今西錦司『生物の世界』

2017年5月24日

## <本講座の位置づけ>

本講座は、小松光一先生による『スピノザの世界-神あるいは自然』を扱った講座の一環であり、何か人智を超えた本質的なもの（すなわち神とか呼ばれるもの）を念頭に置いて考察しています。

## <本講座の目標>

- ・南方熊楠に親しみをもち、彼の気持ち・考え方を自分の中に取り込む
- ・「直観」の正体をつかみ、説明ができるようになる
- ・ダーウィン進化論を乗り越えた今西進化論は、どう現代社会に活かせるか考える

## <本日の流れ/トピック>

- ・南方熊楠の紹介（前回の復習含む）
- ・今西錦司と南方熊楠の共通点や時代背景、類推の手法などの予備知識
- ・『生物の世界』の解説、実社会・実生活への応用

## <前回の復習>

（※前回5月11日、高野山大学の神田英昭さん（僧侶）によるご講演がありました）

主な内容：社会学者の鶴見和子女史（1918-2006）による南方熊楠への見解

- ・真言密教を科学的に解釈した人物が、南方熊楠である。
- ・熊楠は、粘菌研究をきっかけに、南方曼荼羅を考えた。

## <南方熊楠（1867～1941年）まとめ>

### [実績、すごさ]

『ネイチャー』掲載数歴代トップ。柳田国男と並び民俗学の\_\_\_\_\_と呼ばれる。

圧倒的な学問領域の広さと深さ。語学の達人。日本初の\_\_\_\_\_運動。

「東洋と西洋に関わるかくも深い学識を持ち、

人間世界と物質世界の率直で公平でしかも私心のない\_\_\_\_\_」

### [生涯、人物像]

少年期～海外放浪期 ⇒ ロンドン滞在時代 ⇒ 帰国後の後半生 （※詳細はスライドを参照）

### [南方曼荼羅]

仏教学者中村元がこの絵を見て「これは南方曼荼羅ですね」と言ったのを、鶴見和子が解説した：この世界の森羅万象は、あらゆるものが\_\_\_\_\_でつながっていることを示している。

※曼荼羅（マンドラ）とは？

⇒この世界を表現した図。科学で言うところの「モデル」

<太極図⇒循環図>



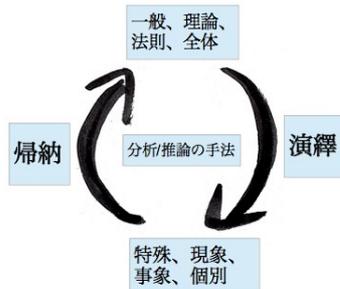
陰も陽も流転し混じり合う



よりシンプルにした図

これを2項対立している様々なものごとに当てはめてみる

[循環図の適用例] 分析（推論）の手法として「帰納」「演繹」



科学において多くの場合、帰納的なアプローチで法則を見つけ出すことが中心だが、時々現れる天才が演繹的なアプローチで時代の流れを変える大発見をする。要は、一方通行でなく、バランスと、流れが循環することが大事。

<類推とは>

人間（だけでなく生物、万物）に備わった生来持っている本能的な認識方法。分析の論理（帰納/演繹）と違い、直観の論理とも言える。

「直観（直感）≒類推」

また、前述の帰納/演繹の循環図だけでは解明できないような事象も、この循環図（平面・2次元）を複数用意し、3次的に重ね合わせて縦軸の方向から透かして見れば、類縁関係を見いだせることがある。この3次的なアプローチが「類推」である。（例：日本神話とギリシャ神話を重ねてみて、人類共通の物語のパターンを探る、など）

<今西錦司（1902～1992年）>

生態学者、人類学者、\_\_\_\_\_の創始者。京大教授、岐阜大学長など。登山家としても有名。\_\_\_\_\_進化論を批判した独自の進化論や、「すみわけ」や『自然学』を提唱した。

<「自然学」とは>

（古代ギリシアの哲学者アリストテレスがまとめた体系も「自然学」だが、それとは違い）  
「自然というのは全部がつながって自然なのであって、ひとつずつの自然などというものはなく、それを言うなら「自然はひとつしかない」と考えるべきだという。この「自然はひとつしかない」という考え方をひっくり返したものが、今西自然学である。」

「動植物から人間までも含めた全体の統合原理」

「どんな部分も全体とつなげ、どんな全体感も部分にあてはめる」

（by 松岡正剛『千夜千冊』）

<ダーウィン進化論（ネオダーウィニズム）とは>

”種の中の個体”が「突然変異」して、「\_\_\_\_\_」によって生き残ったものが新種となる。  
弱肉強食のイメージ。

<今西進化論とは>

”種社会の単位”で環境に応じて変化し、元の種から分化し「\_\_\_\_\_」によってその場を共有する。  
共存共栄のイメージ。

<南方熊楠と今西錦司>

[識者たちの見解]

by 桑原武夫 「南方には理論がない。今西は理論を構築した。」

「南方熊楠と同じナチュラリストの系統から出発しながら今西錦司君が、その、野外観察をふまえて独自の理論をあみ出しているのに対して、南方が個々の問題で手がたい仕事をつみ重ねつつも、全体として目立った理論体系を示さずに終わったのは、日本全体の学問的年齢がなお若かったための不可避的制約があったと考えられる。」

（『南方熊楠-地球志向の比較学-』（鶴見和子著）より）

by 鶴見和子「南方にも理論はあった。今西と同じく、争いを超えられる論理が。」

「今西錦司は、生類は一つのものからさまざまな種の生物に進化してきた、もとは一つのものなのだから、人間はその他のあらゆる生物から学ぶことができる、といった。花からも、木からも、鳥からも、虫からでさえも。今西は草かげろうから棲み分けの理論を学び、南方熊楠は粘菌から「南方まんだら」の論理を思いついた。棲み分けの理論は、同種の個体数が特定の地域で養いきれないほど増えた場合は、他の地域に棲み分けることによって争いを防ぐ知恵である。まんだらの論理は、異なるものが異なるまに共に生きる論理である。現在地球を支配しているのは、単一の価値しかみとめず、世界を「敵」と「味方」に分けて、自分の気に入らないものは暴力によって排除するという理論である。これに対して、今西や南方が、草かげろうや粘菌の生態から学んだ論理は、戦争を正当化する論理を超える可能性を示している。」

（2003/04/20 日本経済新聞朝刊「鶯の死——社会学者鶴見和子氏（文化）」より）

by 川勝平太「両者とも、西洋中心主義とは異なる東洋風の学問をうち立てた。」

「二人とも青年時代に洋学にドブプリと漬かりました。両者とも洋学の造詣は深いのです。しかし、西洋とは異なる独創的学問をうち立てました。両者の学風は非西洋的です。すなわち「東国の学風」をもっています。同時に、地球を視野に入れた全体論的(ホーリスティック)な構えをあわせてもっており、東洋風でありながら、国粹主義やナショナリズムとは明確に一線を画しています。」

（『洋学の日本化-今西錦司と南方熊楠-』）

[2人の共通点]

- ・原点は\_\_\_\_\_である
- ・分野、領域、常識など気にしない
- ・東洋思想の基礎がしっかりありながら西洋の学問（科学）の素養を身につけ、日本文化を基盤に独自の考え方を構築
- ・独特の自然観、全体観、歴史観が多方面に影響
- ・\_\_\_\_\_を分析（帰納/演繹）よりも重視

<『生物の世界』は、スピノザの『エチカ』、ユークリッドの『幾何学原論』と同じ?>

明らかに自明である「公理」と「定義」から始め、「定理」を積み上げていって、理論や結論（主張）を作っている。

■『幾何学原論』（ユークリッド）は、  
「点」や「線」などの”定義”をし、「平行とはどういうことか」などの”公理”を示し、そこから様々な図形の性質（=”定理”）を証明していく。

■『エチカ』（スピノザ）は、  
「実体」「神」などについての”定義”をし、自明な”公理”を設定し、そこからいくつもの”定理”を論証しながら、最終的に「神」の正体（神即自然）を示している。

■『生物の世界』（今西錦司）は、  
「構造とは」「環境とは」「生物と無生物の違いとは」などの根本的なところから定義し直し、そこから一步步理論を組み立て、その結果として「すみわけ」「種社会」などの新しい概念を発見し、ダーウィンの示した進化論（自然淘汰説）を間違いであると指摘した。

<解題『生物の世界』>

#### 第1章「相似と相異」

- ・もとはすべて1つのものから分化した
- ・類推とは、類縁関係の認識が根拠であり、本能とも言える

#### 第2章「構造について」

- ・空間的即時間的、構造的即機能的、身体的即生命的、物質的即生命的
- ・この世界における生物の唯一の存在様式

#### 第3章「環境について」

- ・生物の持つ主体性を示した
- ・環境とは、そこで生物が生活する世界であり生物自身の延長

#### 第4章「社会について」

- ・個体即種、種即個体
- ・種社会→同位社会→同位複合社会の「すみわけ」

#### 第5章「歴史について」

- ・ダーウィン進化論を批判
- ・進化の要因は、全体社会の共栄にあり、弱肉強食や自然淘汰でなく、種の中の提携である

<『生物の世界』（今西理論）を経営に活かす>

■株式会社 リクルートホールディングス

「自ら機会を創り出し、機会によって自らを変えよ」  
（当社のスローガン）

■株式会社 前川製作所

「技術、製造、販売の各部門と、お客様、お客様の市場、時代環境などが有機的に結びついた世界が私たちの活動する場」

「「共創」「棲み分け」をキーワードとして掲げ、顧客の先へと目を向け、新たな価値を生み出すとともに、競合他社との明確な棲み分けを実現している」

（『マーケティングに強くなる』（恩蔵直人著）より）

※当社は、社員全員が『生物の世界』を読んでいて、社内勉強会で研究している。

■株式会社 大地を守る会

「組織づくりは細胞分裂にみならえ」

「大きなかたまりのまま存在し続けることは死を意味する。組織もある程度の規模に生長し自立できるようになったら分解していかないと活力を失う」

「分解した組織は、それぞれに独自の活動をしながらも有機的につながり、瞬時に全体の調和の中で適切な動きがとれる必要がある」

（『農業の出番だ！』（藤田和芳著）より）

※最後に・・・

本講座にはこのレジュメ資料だけでなく、写真・図解付きのスライド資料（pdf 24枚）もあります。レジュメ資料の中の空欄は、そのスライド資料の中に解答が記載されています。

スライド資料の方はウェブ上ではオープンにしておりません。

その入手方法はこちらの当講座の告知文に記載があります。

<http://boom-nao.seesaa.net/article/daichi.html#mokuji8>

また、こちらのブログ記事『南方熊楠は“人間版”インターネット？』もご参照ください。

<http://boom-nao.seesaa.net/article/minakatakumagusu.html>